

リペアラー

装丁
泉沢光雄

写真
Adobe Stock

1

今日は月に一度の、じいちゃんの外出日だ。

毎月何日と決まっているわけではないが、その月の一日に「今月は何日」というショートメールが俺の携帯電話に入る。送ってくるのはいつも同じ番号の携帯電話からだが、それが誰のものか俺は知らない。

その日になると俺は市川いちかわにあるじいちゃんの家にいき、年代物のメルセデスのエンジンをかける。

もう五十年以上前の代物だが、前にじいちゃんの運転手をしていた高園たかぞのさんがすぐいていねいに乗り、手入れをしてくれていたので、エンジンの調子は悪くない。

高園さんは目が悪くなったからと、三年ほど前に運転手を引退した。今もじいちゃんの家近所に住んでいて、庭の手入れをしにきてくれる。

じいちゃんの家は敷地が三百坪ほどあって庭も相当広い。年に二回庭師が植木の剪定せんていにくるが、草むしりなんかはどうもそれじゃおっつかない。

月に一度、じいちゃんの運転手をしたあとは、庭の草むしりをするのも俺の仕事になっている。ちなみに俺の本業はフリーのイラストレーターだ。正直、たいして絵の才能はないのだが、大学をでて最初につとめたスポーツ系の出版社から、雑誌のイラストの注文があるので何とか食えている。野球やサッカー、ゴルフなどのアスリートのイラストは、躍動感や筋肉の描き方など、慣れない人間には難しい。多少下手でも、描き慣れた俺のイラストが売れる理由だ。

その稼ぎを補っているのが、月に一度のじいちゃんの運転手と草むしりのアルバイトだ。じいちゃんは今年八十二歳になる。〴〵占い師だ。占い師といっても看板を掲げて、人生相談に乗っているわけじゃない。

よくは知らないが、政界や財界にじいちゃんのファンがいて、占いという形で相談ごとに応じているらしい。高校の頃からの友人のミヤビは「フィクサー」だといっているが、俺からすればただのお祖父ちゃんや、とてもそんなすごい人間には見えない。

映画なんかででてる「フィクサー」は和服を着て、剣呑そうなボディガードを従えているものだが、じいちゃんは作務衣すら着ていない。家じゃたいいてい厚手のスウェットで、近所にでかけるときは、それに厚手のジャンパーを羽織る。

ばあちゃんは、俺がまだ高校生だった十五年前に亡くなった。近所のスーパーで買物をしているときに脳梗塞で倒れ、それきりだった。

以来じいちゃんはひとり暮らしだ。その年齢の人にしては珍しく、料理もする。食事はたいてい自炊で、買物などは自分でいくときもあるが、高園さんが週に何度かいつてくれているようだ。

高園さんは、はっきりとは知らないがたぶん七十代のどこかで、俺が物心ついたときには、じいちゃんの運転手兼秘書のようなことをしていた。家族はいなくて、じいちゃん家から歩いて五分くらいのマンションにずっと住んでいる。

じいちゃんは、俺の母方の祖父にあたる。子供は俺のお袋しかおらず、であればお袋ももう少し父親を気づかってもいいようなものだが、頭の中が一年中夏の彼女はパートナーと沖繩に住んでいる。

俺の父親とは、俺が五歳になる前に離婚し、それ以来、十年に一回くらいの周期でパートナー

がかわっている。

それはそれで、お袋がハッピーなら文句はいわない。べつたりそばにいられて、嫁をもらえただの定職につけだのと求めてくる母親よりはマシだと思ふことにしている。

ちなみに俺にも兄弟はいない。じいちゃんにもいないから、三代ひとりっ子の家系ということになる。

毎月の決まり通り、外出日は、午前十時ぴつたり市川のじいちゃんの家を出発する。

行先は、JR神田駅に近い古いビルだ。二階に「行政統計研究所」と窓ガラスに書かれた部屋があり、じいちゃんはそこに入っていく。

あるとき、その古いビルの周りに黒塗りの、それもときにはSPをひきつけた車が止まっていることに俺は気づいた。黒塗りを降りたおっさんが同じビルに入っていくのを見た。

どうやらじいちゃんの〴〵客〴〵らしい。

〴〵客〴〵はひとりとは限らず、二、三人いることもある。そんなときは、あちこちに黒塗りやSPの車が何台も止まっているが、俺は知らんふりをするし、向こうから話しかけられもしない。

「行政統計研究所」にじいちゃんがいるのは、一時間ほどで、長くても一時間半だ。じいちゃんが出てくると、俺はビルのまんに車をつける。

そこから五分も走らないところに、有名老舗の蕎麦屋がある。その日は、蕎麦屋の正面に車が止められる。どうやら蕎麦屋の人が場所をとってこれているらしいと、何回かいつて、俺は気づいた。

昼食どきで蕎麦屋は混んでいるが、奥の席が必ずキープされていて、俺とじいちゃんはその場で盛り蕎麦と天種を食べる。有名店だけあつて盛りの量が少ないので、じいちゃん一枚だが俺は

三枚だ。

車の中でも食べているときでも、じいちゃんはほとんど口をきかない。機嫌が悪いわけではなく無口だというのを知っているの、俺も気にはしない。

その日、盛りを食べ終え、蕎麦湯を飲んでみると、珍しく、じいちゃんが話しかけてきた。

「近いうち、お前に頼みごとをしてくる者がいる」

「頼みごと、ですか」

「そうだ。近しい人間だ。助けてやれ。お前のためにもなる」

俺は蕎麦猪口そばじぐくをもった手を思わず止めた。

じいちゃんがこんな「予言」をすることはめつたにない。一年に一回、あるかないかだ。

それが当たるかといえば、微妙で、まるで当たらないこともある。高校の頃だったか、「日本史をきっちりやれば、志望の大学に入れる」といわれ、がんばったが落ちた。くやしくて、占いが外れたと文句をいったら、

「お前の努力が足りなかったからだ」

と、あたり前のことをいわれ、がつくりきた。

そのあとじいちゃんがいったのは、

「必ず当たる占いなどない。そんなものがあつたら、人は努力をしなくなる」

という言葉だった。ムカついていた俺だったが、それには妙に納得したものだ。

「近しいって、誰ですかね」

いって、俺はじいちゃんの顔をうかがった。が、じいちゃんはそれ以上は説明せず、

「いくぞ」

と俺をうながした。

「はい」

俺も蕎麦猪口をおいて立ちあがった。勘定はじいちゃんが払う。

俺がじいちゃんに初めて会ったのは、離婚したお袋が最初のパートナーを市川に連れていった、十歳のときだ。それまでは、生まれた直後に病院に見にきたことがあるだけだ、とお袋はいった。どうやらじいちゃんは、俺の父親を好きではなかったらしい。

確かに、離婚したとはいえ、それ以来一度も息子に会おうとしない父親はどうかと俺も思う。

小さな頃は父親に会いたいと思うことがあつたが、今はそんな気持もない。

だが初めてじいちゃんに会ったときも、あまり親しみを感じなかった。市川の家のお袋と俺がすわっていると、じいちゃんが入ってきた。まず俺をおっかない顔でにらんだ。

丸くて頭のとっぺんに白髪がちよほちよほと残ったじいちゃんの顔は、決して威厳のある造作というわけじゃない。だがそのときだけは目を大きくみひらいて、まじまじと俺を見たものだから、俺は恐くなった。

「想おもいか」

じいちゃんが訊ね、俺は黙って頷うなずいた。じいちゃんはしばらく無言で俺を見つめ、それからお袋に目を移した。お袋の新しいパートナーは、家の外に止めた車の中で待っていた。

「結婚するのか、今度の相手と」

じいちゃんが訊ね、お袋は首をふった。

「今のところ、その気はない。お父さんがしろというなら考えるけど。でも、結婚はこりごりな

の。するのは簡単だけど、別れるのが大変だから」

「しなくていい」

じいちゃんは即座にいった。そのときは鮮明に覚えている。

「だが想一を泣かせるな。泣かせるようだったら俺が預かる」

そのときは絶対嫌だ、と思っただけだ。

こんなおっかない爺さんと、だだっ広い家で暮らすのはごめんだと、俺はお袋を見た。

「大丈夫よ」

お袋は、じいちゃんと俺の両方に頷いた。

「想一につらい思いはさせない」

「その言葉、守れ」

じいちゃんはいった。

それ以来、月に一、二度、俺は市川の家泊まりに行くようになった。初めの頃はばあちゃんが生きていたし、高園さんも優しかった。市川の家で俺の相手をするのは、たいていその二人で、じいちゃんが書斎からでてくることはほとんどなかった。

「おじいちゃんは何してるの？」

俺が訊くと、ばあちゃんも高園さんも、

「お勉強」

と答えた。

「学校にいつてるの？」

「いつてないけど、おじいちゃんは、人は一生勉強しなければいけないって、いつもおっしゃっ

ているのよ」

「僕は嫌だ。勉強、好きじゃない」

「想一には想一の人生があるのだから、それでいい」

ばあちゃんはこのこして答えた。

「おじいちゃん偉いの？」

俺が訊くと、ばあちゃんは困ったように高園さんを見た。

「とても偉い方ですよ。いろんな人が、想一さんのおじいさまに話を聞きます。何より立派なのは、おじいさまは決していばることなく、その人たちに親切にしてあげていることです。そのため勉強をされているんです」

高園さんが答えた。

「お金は？ お給料はもらえるの？」

「もらえます」

高園さんは頷いた。

「おじいさまは、いろいろな企業の顧問をなさっておいでですから」

「顧問って何する人？」

「相談に乗るんです」

「何の相談？」

「いろんなことの相談です。会社の経営や、人生の選択、ときにはこの日本をどう導くべきかという相談もあります」

「じゃあ偉いんだ」

「とても立派な方です」
今にして思えば、俺がじいちゃんにずっと敬語で接しているのも、そのときの記憶が理由なのだろう。

とても立派なおじいちゃんに、タメ口はきけないと子供心に感じた。
とはいえ、じいちゃんが俺が高圧的に接したわけではない。無口の上に、口を開けばいかめしい言葉づかいをするので、自然にこっちがそうなるだけだ。

じいちゃんと長く話しこんだ記憶もない。ばあちゃんが亡くなってからは、市川の家泊まりにいくこともなくなった。

そんなじいちゃんと俺との仲をとりもったのが高園さんだった。

ある日、俺の携帯に高園さんから電話がかかってきた。

「先生のお役に立ちたいのですが、このところめっきり目が悪くなりまして。想一さんは運転免許をおもちですよね」

いきなり高園さんはいった。

「もってます」

4WDの軽が俺の足だ。時間があると、それであちこちのグラウンドにいき、写真を撮ったりスケッチをしたりしている。

「先生のお車の運転をしていただきたいのです。月に一度でけっこうです。お仕事として謝礼もお支払いします」

高園さんが口にしたのは、日当としてはかなりの金額で、家賃と駐車場代でかつ、かつだった俺には、実にありがたかった。

「いいですけど、じいちゃんは平気なんですか。俺がやってもかまわないですかね」

「先生も、想一さんの運転を望んでおられます。先生が信頼される方であれば、お任せできますん」

「だったらやります。やらせてください」

こうして俺の月に一度のバイトが決まった。

「行政統計研究所」へのいきかたは、高園さんがいいいな地図を描いて渡してくれた。年代ものメルセデスには、カーナビゲーションなんて便利な道具はついていない。

蕎麦屋をでたら、まっすぐ市川の家に戻る。メルセデスを車庫に止め、夕方まで草むしりをするが常だ。

メルセデスを降りたじいちゃんはすぐ書齋にこもり、それきりでてこない。

夕方になると高園さんがやってきて、

「ご苦労さまでした」

といて、封筒に入った日当をくれる。ありがたく受けとった俺は市川駅まで歩き、JRに乗りこむという流れだ。

俺の住居は、JRの北千住駅きたせじゆから歩いて十分ほどの古いマンションだ。地下に駐車場があつて4WDを止めておけるのが便利で、もう十年近く住んでいる。

錦糸町きんしちようでJRから地下鉄に乗りかえようとしているとき、携帯電話が鳴った。

ミヤビからだ。

「ほい」

「今、どこ？」

「錦糸町。じいちゃん家の帰り」

答えてから、じいちゃんの「予言」を思いだした。近しい人ってミヤビなのか。

「頼みがあるんだけど」

「どうやら「予言」は当たったようだ。」

「どうすりゃいい？」

「えっと、晩ご飯食べた？」

「まだ」

「じゃ食べながら話さない？」

「どこで？」

ミヤビは世間的には「ノンフィクション作家」ということになっている。ずっとビジネス誌のライターをしていたが、二年ほど前にわりに有名なノンフィクションの新人賞を受賞して、それが本になった。が、そう簡単に作品が売れるわけもなく、ライターをつづけている。ミヤビの住居兼事務所は飯田橋だ。

「飯田橋まで来られる？」

「いけるよ」

「おいしい炒飯奢るよ」

「いいね。大盛りな」

俺は答えて、JRの改札に戻った。

*

ミヤビとは高校の部活がいつしよだった。新聞部だ。小学校の頃から野球とサッカーをかけたちでやっていた俺は、運動神経には自信があつた。中学三年まではスポーツ万能とおだてられ、アスリートになる夢さえ見ていた。それが、腰を壊して潰えた。

そのときは覚えていいる。バキッという衝撃とともに脳天まで走った痛みの直後、「腰が抜ける」とはこういうことかという状態になった。サッカー部の後輩に背負われて整形外科の玄関をくぐったのも忘れられない。

俺の運動生活は中学で終わった。高校を卒業するまではコルセットを手放せない日々がつづいた。

運動部への入部は医者に禁じられた。やむなく、およそ縁のない文化部である新聞部に入った。ちなみに俺がまがりなりにイラストレーターで食っているのは、その新聞部でいつしよだったミヤビにカットを描かされたのがきっかけだ。

あるとき紙面の空きを埋めるのにカットが必要になった。描く奴はいっぱいたが、どれもマンガのような絵柄で、顧問の先生が

「漫画はダメだ」

という主義だった。マンガを読むのは好きだが、描くのは興味なかった俺の絵を、

「うん、これは絵になっている」

と先生が認め、以来、空きができるたびにミヤビは俺にカットを描かせるようになったのだ。

もしあのとき美術部にでも入っていれば、と思うこともある。デッサンの基本やスケッチのイロハを勉強できて、今よりも少しマシなイラストが描けるようになっていたかもしれない。

だが人生にやり直しがきかないことを、両親の離婚や腰の怪我で俺は学んだ。今ある場所でベストを尽し、無意味に後悔したりしないのが俺の信条だ。

高校卒業後、ミヤビは名の通った大学にいき、大手出版社に就職した。俺もまた、あまり名の通っていない大学から小出版社に就職した。野球やサッカーの雑誌をだしている出版社で、ここでも外注にだす予算のないイラストを描くのが俺の仕事になった。

七年ほどいて、給料の安さにはやげがさした俺はイラストレーターとして独立することにした。その頃、会社は外注にもそこそこの画料を払うようになっていたのに、俺のイラストはただ働きだったからだ。

同じ頃ミヤビも大手出版社を退職し、フリーのライター兼編集者になった。その出版社からは作家になる人間が多く、「仕事ができる人間ほど早く辞める」といわれていることを同じ業界の隅っこにいる俺も聞いていた。

ミヤビが「仕事のできる人間」だというのを、高校時代から俺は知っていた。頭の回転がめちゃくちゃ速い上に、物知りだが決してそれをひけらかさない。人がたくさんいる場所ではむしろ静かにしているので、その他大勢だと思われがちだ。

だが実際は、その場にいる誰より状況を把握し、最善の選択を考えている。求められればそれを述べるが、そうでなければ黙っている。

あるときそのことに気づいた俺は、新聞部の編集会議でミヤビに意見を訊くようになった。顧問の先生すら気づいていなかったミヤビの賢さを、俺が見抜いたのだ。

が、そのことで俺とミヤビは「つきあっている」と疑われることになり、「迷惑だ」といわれた。俺だってミヤビは好みじゃない。ミヤビはいわゆるメガネっ子で、地味を絵に描いたような風貌だ。俺の好みはもつと華やかな、ミヤビにいわせれば「髪をまつ金金に染めた、頭カラッポ」のタイプだ。

だから互いを恋愛の対象として見たことは一度もない。だが最も自分の素をだせる相手ではある。ミヤビは俺を「挫折した筋肉バカ」と呼んでいる。ただの筋肉バカはマツチョで男優位の考え方をするから大嫌いだ。腰をやった俺はそこから落っこちて、マトモになったのだという。じゃあ青白いインテリが好きなのかというと、そういう奴はたいがい自分が一番頭がいいと思っっているからもつと嫌いだという。

要するに男が嫌いなのだろう。もしかすると女をパートナーにしたいタイプなのかもしれない。こういう時代だし、別にそれならそれで俺はかまわないといったら、

「あんたどこまで馬鹿なの」

と冷たい目でらまれた。

AじゃなければB、という選択をする人間がいかにか愚かかという話を、その日はひと晩聞かされた。

説教なんて誰にされても嫌なものだが、不思議とミヤビのそれを、俺は嫌いじゃない。

ミヤビがもし「頭まつ金金のカラッポ」タイプだったら、真剣に惚れたかもしれないと秘かに思うことすらある。

が、ミヤビがそうなることは、太陽が西から昇る以上にありえない。

ミヤビから電話をもらった四十分钟后、俺たちは神楽坂の老舗中華料理店で向かいあっていた。俺と話した直後に、ミヤビが席を予約したのだ。高級店ではないが人気があるので、席がとれたのはラッキーだったとミヤビはいった。

大盛りと並盛りの炒飯、餃子を二人前と壇ビールを一本頼んだ。ミヤビは俺より酒に強いが、ひとり酒は飲まない。

「頼みってなんだよ」

「調査の手伝い」

ミヤビは身長が一六五センチほどあり、ひよろりとした体つきをしている。前髪を額のところではぱつぱつ切ったおかつぱ頭で、ぱつと見は、若いのだが年がいつているのだからわからない。年齢は俺といっしょで三十三だ。

二人とも独身、ひとり暮らしだが、ミヤビの住居兼事務所には熱帯魚がいる。

「新作か」

「ちよつとちがう。頼まれたんだ」

「いつてミヤビはグラスのビールを飲み干した。」

「誰に？」

「知らない人。でも紹介はあった。あたしがもらった新人賞の選考委員をやってる、ノンフィクション作家の先生」

「断れないスジって奴か」

「そうだけど、気さくな先生でさ、嫌なら断ってくれていいから、つて。でもギャラがいいし、きつと勉強にもなるだろうから、やってみればつていわれた」

ミヤビは、俺も存在を知っている、五十代の女性ノンフィクション作家の名前を口にした。

「おお、確かに有名どころだ」

「その先生も昔、同じような調査を頼まれたことがあったのだった。それですごく勉強になったからつて。もしあたしが今忙しくなければ、お金にもなるし、やってみたらと勧められた」

ノンフィクション作家は金がかかって大変だという話をミヤビから聞いていた。頭の中で物語をこしらえる小説家とちがい、ノンフィクションには取材がつきものだ。

交通費、取材謝礼、そういったもろもろは、作品が本になるまで回収できない。原稿を記事として雑誌などに連載できればいいが、そこにたどりつけるノンフィクション作家はひと握りしかないという。小説でもそうだが、売れないうちは書きおろしをする他ない。つまり原稿料も取材費も原則ナシだ。

すべて自腹で取材し、できあがった原稿を出版社が本にする価値なしと判断したら、一円も回収できない。

そんな思いをするくらいなら小説を書けよ、といったことがある。ミヤビなら小説だつて書けるだろう。

そうしたら、『あんた、馬鹿?』とまた冷たい目でいわれた。

ノンフィクションと小説とは、書く頭の構造がまるでちがうというのだ。どっちが上とかではなく、優れたノンフィクションを書けるからといって優れた小説が書けるとはまったく限らず、その逆もまた真なのだと言教された。

小説家がノンフィクションに向いてないというのは、何となく俺にもわかる。全部頭の中でこしらえられるのに、いちいち他人に取材して書くなんて面倒な真似をしたい奴がいるとは思えない。

そういつたら、ため息をつかれた。小説家も取材はする、というのだ。小説の題材にする職業や地域、歴史について、取材をせず、すべて嘘っぱちでは書けない。書けば必ず「事実と異なる」という批判をうけることになる。

取材した事実を散りばめおもしろい嘘をつくのが小説家、取材した事実をつなぎあわせ、訴えたいテーマを浮かびあがらせるのがノンフィクション作家だという。取材した事実をただ並べただけのものはルポルタージュでしかない。

『絵が描けるからって、あんたにマンガを描けっていつたら怒るでしょう?』

『怒らないよ。才能がないと答えるだけさ』

俺は答えたものだ。だがイラストとマンガがちがうくらい、ノンフィクションと小説はちがうということにはわかった。

『そんなにお金がいいのか?』

ミヤビは間をおいた。混んでいる中華料理屋を見回し、指を二本たてた。

『二十万?』

『その十倍。しかも経費は別』

『いったい何の調査だよ。ヤバイスジじゃないのか』

俺は驚いていった。

『それが微妙なんだ。ヤバイとは思わないのだけど難しいってどうか』

ミヤビはいつてビールを飲んだ。俺はグラスに注ぎ足してやった。

『難しい? 会うのがたいへんな相手とか?』

『会うのは無理だね。なんせ死んでる人だから』

『歴史上の人物ってやつ?』

『それもちがう。たぶん誰も知らない人』

『意味がわからん』

ミヤビが携帯をとりだした。操作し、画面を俺に向ける。

『どうやら新聞記事のコピーのようだ。』

『ビル屋上に遺体 孤独死か』

と見出しがあつて、本文はこうつづいている。

『十日朝、港区内のビル屋上に男性の遺体があるのを、清掃に入ったこのビルの管理会社の社員が発見した。遺体は四十代から六十代にかけての男性で、警察によればめだつた外傷はなく、病死と思われる。遺体の周囲には身のまわりのものを入れた紙袋などがあり、ホームレスが何らかの方法で入りこみ、そこで生活していた可能性があるという。男性の身許は不明』

『えっ、こいつを調べるの?』

『そう』

頷いて、ミヤビは記事の写った画面をスクロールした。日付の部分俺に向ける。

『昭和六十年(一九八五)三月十一日』とある。

『四十年前じゃないか』

ミヤビは頷き、餃子をかじった。中の具に熱つつぶやいて、急いでビールを流しこむ。

それを見て、ミヤビがひどい猫舌だということを思いだした。ラーメン屋にいくと、空の丼をもらい、麺とスープを少しずつ移して食べる。そうでないと、一杯のラーメンを平らげるのに十分以上かかってしまうのだ。

だから混んでいるラーメン屋にはいけない。

ミヤビがラーメンを食いたいときは、人気のないラーメン屋に行くことになる。

「四十年前に死んだホームレスの何を調べるんだ？」

俺は訊ねた。

「全部」

ミヤビは答えた。

「全部ってどういうことだよ」

「その人が何者で、なぜビルの屋上にいたのか。死因も」

「警察にいわねばわかるんじゃないか」

「あんた馬鹿？ そんなこと当然したに決まってるでしょ」

ミヤビはいつて、半分かじった餃子をふーふー吹いた。

「したらどうだったんだよ」

「身許は警察でもわかってなかった。だけど事件性がないから、遺体は茶毘に付されて、都の無縁墓地に埋葬された。所持品の一部は保管されてみたいんだけど、確認にきた人はいない」

ようやく餃子の残り半分を口にいれ、熱っ熱っといながら呑みこんだ。俺はミヤビのために新しい餃子を箸で半分に割り、訊ねた。

「ネットで検索は？」

「したけど、インターネットというのは、インターネットができる前のことは、でてないの。歴史的な事実とか有名な人の情報とかはあっても、世の中の小さなできごとなんて、誰もアップしない。新聞記事くらい」

「それがこれか」

俺はミヤビの携帯をさした。

「それがこれ。記事じたいはいろんな新聞に載ったけど、中身はどれもいっしょ。あと、追いもなし」

あと、追いというのは、事件について新しく判明した事実を載せることだ。だが警察も身許がつかめなかったのでは、あと追いしようがない。

「もしかして依頼人はこのホームレスの関係者じゃないのか」

俺はいった。ミヤビは頷いた。

「それはちよつと考えた」

「ミヤビは依頼人に会ったのか」

ミヤビは首をふった。

「紹介してくれた先生に『受けます』と伝えたら、メアドを教えていいかと訊かれ、オーケーした。そうしたら、メールが送られてきた」

ミヤビは携帯をいじり、画面を向けた。

『穴川雅先生。このたびは当方のお願いをお聞きいれ下さるとのこと、大変お忙しい中、まことにありがとうございます。』

さて、このたび先生にご依頼したいのは、添付します新聞記事の人物についての調査です。

この人物が何者で、なぜこのような場所でひとりで亡くなっていったのかを、先生にぜひ調べていただきたいのです。かなり以前のごことで、決して簡単ではないと存じますが、傑作『籠城の鬼』をお書きになられた先生なら、きつと真実をつきとめて下さると信じております。調査に期限はございませんが、一年以内であれば幸甚に存じます。尚、調査謝礼については、二百万円ほどを準備いたしております。お引き下げ下さるなら、まず調査経費の前払いとして五十万円を振込ませていただきます。また経費の精算は月ごとにいたしますので、月末に領収証のコピーまたは写真を添付したメールをお送り下さい。

先生が調査を始めて下さることを、心より願っております。

木村伊兵衛

「木村伊兵衛って——」
俺はつぶやいた。

「同姓同名の有名な写真家がいるけど一九七四年に亡くなっている。それ以外の木村伊兵衛は、ネットじゃひっかかってこない」

ミヤビは頷いた。俺はいった。

「ネットはさ、ちょこちょこつと上っ面を調べるのには便利だけど、本当に知りたいことはでないからな」

じいちゃんの受け売りだ。

以前話をしていて、ネットで調べるといって、こういわれた。

『インターネットには物事の上っ面しか載っておらん。高園がコンピュータを使うというので、試しに調べものをさせてみたが、見出しのようなことしかでてなかった。しかも明らかになま

いを平気で載せている輩やからまでいる。インターネットで得た知識をしたり顔で披露などと大恥をかくぞ』

「それにはまったく同意見なんだけどさ、人名なんかの検索には便利なんだ。事典に載っているような有名な人じゃなくても、SNSや団体の会員名簿なんかで存在を確認できるからね」

俺が割った餃子に箸をのびしながらミヤビがいった。

ちなみに「籠城の鬼」というのは、ミヤビが新人賞をもらった作品のタイトルだ。ひきこもりやそれに近い生活をしながら、インターネットで収入を得たり、ゲームなどのコミュニティを主宰している人間たちを取材し、その人生観を通して他者との新たななかかわりかたについて考察した。

「籠城の鬼」が画期的だったのは、インターネットを接触のきっかけにしながらも、対象人物に面と向かい取材したところだ。チャットやメールを使つての取材では、相手の顔はもちろん性別すら確認できない。向こうにとつて都合のいい情報だけを与えられ、それに反論したり疑問をぶつけると、一方的に連絡を断たれてしまうこともある。真実を知るには、取材対象の人物に直接会う以外ない。

そのために粘り強く時間をかけて説得し、相手の信頼を得た。当然、最初は拒否しかされず、あきらめず会おうとすると、からかわれたり、ストーリー扱いされ、ネット上にあることないことを書きたてられたりもした。

それでも粘り、ついには根負けして会ってくれた人物、ある日を境に連絡がとれなくなる人物、さまざまだった。ミヤビはそうしただきことを取材日記として、SNSにアップした。取材対象のプライバシーには配慮し、対象者の名はあげなかった。

「七転八倒日記」と題された、その取材日記が、ネット上で注目を集めた。

初めは、馬鹿なことをやってるライターがいるぞとか、売名行為に決まってるとか、批判的な反応が多かったのが、無視されてもからかわれてもあきらめないその姿勢に共感する者も現われ、「自分はこういうことをしているが、もし興味があるなら、会ってもいい」というメールが届くようになった。

もちろんそういう中にも、別の目的を隠している奴がいて、襲われそうになったりミヤビの個人情報さらされたりもした。

それにもめげず、取材をつづけた成果が「籠城の鬼」なのだ。

本がでて少しして、ミヤビはSNSから撤退した。それを裏切り行為だという人間もいたが、「インターネットと聞いただけで吐きけがするほどお腹いっぱい」というミヤビの言葉に俺は納得した。

ネットでは、ネットができる前のことは調べられない、というのはまったくその通りだ。よほどの事件や事故でない限り、ほんの五十年前のできごとがインターネットにはでていない。でていても、まるで不確かな情報だったりする。

にもかかわらず、ネットにない事件は起きなかったとか、検索してもヒットしない人間は実在しないとか、平気でいう奴がいる。

猫も杓子もSNSをやったがるのは、ネットに痕跡を残さないと存在してないと思われるのを恐がっているのじゃないかと、俺なんかは思う。

要するに、俺が古臭い人間だというだけなのだが。

「木村伊兵衛では偽名だよ。本当に金を払ってくれるかどうか怪しくないか」

俺は次の餃子を割ってやりながらいった。

「それが五十万円はすぐに振込まれたの。だからここはあたしの奢り」

「ビールもう一本！」

俺は叫んだ。

「ちよっと！ いいけど、手伝ってくれるの、くれないの？」

ミヤビは俺をにらんだ。

「手伝うって、何をすればいいんだよ」

「それはまだわからない。ただこれに関しちゃ資料に当たるという方法が使えない。いろんな人に会うことになると思う」

「そりゃそうだろうな」

「あたしひとりじゃちよっと厳しい。それに足もいる」

「運転手ならここにおりますよ、はい」

「察しがいいわね」

「で、日当はおいくらほどいただけるので、先生」

「領収証をくれるなら、拘束時間にかかわらず、一日一万円。成功報酬がそれとは別に二十万でいいのはどう？」

「成功報酬にもうひと声」

「三十万」

「のった」

俺はいった。この先しばらく、仕事が減ることはあっても、増えることはない。ミヤビに雇わ

れたら、とことんコキ使われそうだが、木村伊兵衛からの依頼に興味があった。人知れずビルの屋上で死んだホームレスについて、なぜ調べてほしいと行ってきたのか。

「でもさ、依頼人がこのホームレスの縁者だというのはちがうかもしれない」

思いつき、俺はいった。ミヤビはふはふいながら餃子を頬ばっている。十二箇あつた餃子のうち、六箇をとくに俺は平らげ、残っているのはミヤビのぶんだけだ。

炒飯が届いた。

「どうしてそう思う？」

蓮華で炒飯を崩し冷ましながらミヤビが訊ねた。グリーンピースをひとつずつすくい、俺の皿にのせる。ミヤビはグリーンピースが嫌いで、俺は好物だ。

「だってこの依頼人は金に困ってない。亡くなったあと調べるくらい関係があつたのなら、ホームレスになるのを見逃したりはしなかったのじゃないか」

「本人がそれを拒否した可能性もある。仲が悪かつたとか、情けは受けたくない、とかの理由で」

「なるほど」

「あるいは亡くなったのをあとから知って、でも表にでられない事情があるから、なぜそうなたかを知りたいと思つたとか」

「でもなぜお前なんだ？ 専門家に頼んだほうが早くないか。世の中には興信所とか私立探偵つて商売があるのに」

「それにはあたしも同感。ただ、もしかすると、と思うことはある」
ミヤビは炒飯のひと口めを頬ばっていった。

「何だよ」

「このホームレスの孤独死に、何か社会性のあることが関係している」

「社会性？」

「あたしがこれを材料に、ノンフィクションを書きたくなるかもしれないってこと」

「金を払ってネタを提供してくれてるっていうのか？」

ミヤビは頷いた。

「このホームレスの人生や死因について調べたら、書いて訴えたくなくなるような事実が隠されているかもしれない。それにあたしが食いつくのを狙っている」

「食いつくのか？」

俺はミヤビを見つめた。

「正直わからないけど、『籠城の鬼』のあと、いい材料にめぐり会えていないのは事実。あたしの気負いもあるけど」

「インターネットネタは嫌なのだろ」

「嫌。いろんな雑誌や出版社から、そういう話はいっぱいきたけど、インターネット評論家になる気はない。あれきりにしたいんだよね」

ミヤビの気持はわかつた。ミヤビが「籠城の鬼」でインターネットを扱ったのは、たまたまでしかない。インターネットとひきこもりが必ずつながっているとは限らないし、糸口としてインターネットがあつたかもしれないが、ミヤビ自身はそれほどインターネットに思い入れも問題意識も抱いていない。

俺がいうのも何だが、マスコミという奴は、何にでもラベルを貼りがたがる。さしずめミヤビは、

「インターネットにおける社会問題の専門家」といったところだろう。

そうなることを拒否した結果、ミヤビが次作を書きあぐねているというのも理解できる。

インターネットとは無縁の、ホームレスの孤独死という題材に、ミヤビが興味を惹かれるのも無理はなかった。

「とすると、木村さんはひと筋縄じゃないかな相手だな」

ミヤビは無言で炒飯を食べている。

「紹介してくれた先生は何もいってなかったのか？」

「何も。選考ではあたしのことを評価してくれたけど、そこまで親しいわけじゃないし。だからこの話があったときも驚いた」

ミヤビは答えた。

「もしかすると、木村がその先生という可能性はないか？」

「そりゃないよ。もしネタにしようと思うのだったら、先生にはスタッフが何人もいるもの。自分のところの人間に調べさせるって。ノンフィクションのおいしいネタをわざわざ新人にプレゼントしないでしょう」

ミヤビは首をふった。

「そうか」

俺は炒飯を平らげ、残っていたビールを流しこんだ。満腹だ。

「で、明日から動ける？」

俺はちよつと考えた。レギュラーのイラストの原稿は一昨日に入稿した。単発の依頼があるが、来週末が締切りだから余裕はある。

「大丈夫だ」

「カメラもつてきて。この現場にいくから」

「死体の見つかったビルか」

「調べたら、まだあった。六本木の七丁目」

「よく住所がわかったな」

新聞には港区内のビルとしかでていなかった。

「古い官報を検索したら、全部でてた」

「官報？ 警察じゃなくて？」

「死体が見つかった当初は警察が扱うけど、事件性がないと判断されたら、行旅死亡人^{こうりよ}扱いと
いうことになる」

「コウリヨ、何だって？」

「行旅死亡人。要するにゆきだおれのこと。身許のわかるものをもっていない死体が見つかる
と、発見日、場所、性別などを官報に掲載して、心当たりのある者の申し出を待つ。区の福祉事務
所の管理なの。ちなみに屋外じゃなくてアパートとかで孤独死しているのが見つかったら、身許が
わからなければ、行旅死亡人扱いになる」

「葬式はだしてもらえないのか」

「自治体が荼毘に付して、身内が見つかったら費用を回収するみたい」

「官報に載るんだ、そういうのが」

俺は感心した。官報と聞いてイメージできるのは、役人の人事とか法律がかわったとかのお堅
いお触れだ。

ミヤビは携帯を操作し、俺に向けた。

「行旅死亡人のデータベース。官報掲載の記事」

『本籍・住所・氏名不詳、男性、推定年齢七十代、白色長袖シャツ、グレイズボン、現金百円所持。上記の者は令和三年七月一日、午前七時二十分、足立区保木間二丁目×番×号のビル駐車場内にて、首を吊った状態で死亡しているところを発見。死亡推定日七月一日午前四時頃。身許不明のため火葬に付し、遺骨を当区で保管。心当たりの方は当区福祉課まで。』

令和六年一月三十一日 東京都足立区長

「へえ」

俺は唸った。官報なんて読んだことがなかったから、こんな記事を載せているとはまるで知らなかった。

「で、これが昭和六十年の記事。古い官報だから、調べるのに手間がかかった」

ミヤビはバッグから紙をだした。コピーのようだ。

『本籍・住所・氏名不詳、男性、推定年齢五十代から七十代、紺スーツ、白色シャツ、現金一万八千五百円所持。上記の者は昭和六十年三月十日、午前十一時、港区六本木七丁目×番×号のビル屋上にて死亡しているところを発見。死亡推定日は昭和五十九年十二月頃。検視の結果、外傷はなく死因は病死と思われる。身許不明のため火葬に付し、遺骨を当区で保管』

「外傷がないから病死って、大雑把だな」

俺はいった。

「死体が見つかったのが三月で、死亡推定が前の年の十二月。寒い季節だとしても、相当傷んでたんじゃない」

ミヤビが冷静にいった。

「腐ってたってことか」

「ネズミとかカラスもいるだろうし」

「よせよ」

俺は首をふった。飯のあとに想像したくない。ミヤビはつづけた。

「事件性が疑われるなら解剖したと思うんだよね」

「身のまわりのものを入れた紙袋があったって新聞記事にはでてたな。それでホームレスだと思われたわけだ」

俺がいうと、

「お金をもっていたのも事件性がないと判断された理由だと思う。強盗とかにあつて殺されたわけじゃないって」

ミヤビは頷いた。

「でも紺スーツに白シャツだろ。いちおう勤め人みたいな格好してたわけだ」

「ホームレスだからって、みすばらしい格好をしているとは限らないよ。むしろホームレスなのを隠すために、スーツを着ていたのかもしれない」

ミヤビの言葉に納得した。昭和六十年だと、まだインターネットカフェとかもなかったろう。ホームレスが寝泊まりできる場所は、今よりはるかに少なかったにちがいない。

「あたしらが生まれる前。携帯電話もなかった頃だよ」

ミヤビがいった。

「そうか。バブルってのは——」

「それはもうちよつとあと。あたしらが生まれる直前くらい」

「そういわれても、四十年もたっているとしたら、想像がつかない。」

「携帯電話はない。パソコンも——」

「パソコンはあったかもしれないけど普及はしてないよ。仕事で使う人がいたかどうかくらいじゃない。インターネットもない」

「そもそも行旅死亡人で、そんなにいたのか」

「少し調べてみたけど、二十年くらい前から減ってはきているみたい。二十世紀は一年に千人以上いたのが、半分近くまで減ってる。でもそれは自殺者やゆきだおれが減ったということではなくて、身許不明の死体が減ったからだと思う。理由はこれ」

「ミヤビは携帯電話を掲げた。」

「なるほど。死体のそばに携帯があれば、少なくとも身許は判明するな」

「だから昭和六十年には千人以上いたとしても不思議はない」

「それも見つかった場合の話だろう」

「そういうこと」

「俺は息を吐いた。興味はあるが、調べるとなると大変そうだ。」

「嫌になってきた？」

「ミヤビは俺の顔をのぞきこんだ。ミヤビのぶんの餃子と炒飯も、いつのまにかなくなっている。俺は首をふった。」

「そうじゃないが、けっこう難しそうだなと思ってさ」

「簡単な調べごとに二百万も払う人いないでしょ」

「ってミヤビは立ち上がった。勘定を払ってくれる。」

「中華料理屋をでた俺たちは神楽坂を下り、喫茶店に入った。もう一軒いかかとミヤビに訊かれ、酒よりコーヒーにしようと言われ俺は答えたのだ。」

「アイスコーヒーを頼んだ俺は言った。」

「そのビルが今もあるとして、屋上にあっさり入れるかな」

「それはいつてみなきゃわからない。でも昭和六十年にあつて、ホームレスが屋上まで入りこめたということは、その当時でも決して最新の建物じゃなかったと思うんだよね。つまり今は、もっと古くなってる」

「ミヤビが答えた。」

「となると、築五十年とか六十年とかか。相当古いな。六本木にもそんなビルがあるのか」

「逆に六本木だから残っている可能性がある。店子たなこがまた貸しだったりして、権利関係がややこしくて建て替えもできない。新宿歌舞伎町しんじゅくかぶきまちにそういうビルがあるのを知ってる」

「でもホームレスがそこで死んで以来、簡単には立ち入れなくなっているのじゃないか」

「俺は言った。」

「そうかもしれない。だけどとりあえず現場から始めないと。とっかかりが何もないし」

「ミヤビはいつて、つづけた。」

「本人がそうしたかどうかわからないけど、そのビルの屋上が死に場所になったわけでしょう。どんな景色が見えて、どんな気持ちで息をひきとったのか、そこをまず考えたい」

「わかった。車はどうする？」

「明日のところはまだいいよ。六本木なんて止めるだけでも大変そうだし。カメラをもって、そ

うだな、午前十時に六本木駅で待ち合わせしよう」
「了解」

2

北千住から六本木までは地下鉄で一本だ。翌日、午前九時五十分には六本木駅についていた。途中、ミヤビからラインがきて、地下鉄六本木駅でも六本木ミッドタウンに近い出口で待ち合わせしようといってきた。

その言葉にしたがい、俺は大江戸線の改札口に近い出口でミヤビと落ちあった。

「おっ、えらい。スーツを着てきたんだ」

「会うなりミヤビは口もとをほころばせた。」

一張羅とはいわれないが、めったに着ないスーツを、ネクタイなしで俺は着ていた。人から話を訊くのには、上着くらいは着ていないと怪しまれると思ったのだ。

ミヤビも黒のパンツにグレイのジャケットを着け、シヨルダーバッグをさげている。俺は背中にリュックを背負い、カメラはその中だ。

「常識だろう」

「ちょっと得意になって、俺はいった。」

「そっか。あんただって元編集者だもんね」

「お前がいたとこほど立派じゃないけどな。それでどっちだ？」

「あっち」

六本木ミッドタウンとは外苑東通りをはさんだ反対側をミヤビは指さした。

俺たちは道路を渡った。携帯の地図アプリを見ながらミヤビは進んでいく。外苑東通りから一本奥の道に入り、さらに狭い、車では通れないような路地を曲がった。

いきなりあたりの雰囲気がかわった。大きな建物はひとつもなく、せいぜい四、五階だてばかりだ。外階段のアパートや小さな一戸だてが路地の左右にちらなっている。

空を見上げると、右手に六本木ミッドタウン、左手に六本木ヒルズの超高層ビルがそびえている。

大通りの喧騒が嘘のように消えた。人も歩いていない。

にゃーと鳴き声をたてて猫が路地を横切った。木造の小さな二階屋とアパートの壁のすきまをすり抜けていく。

「こんなところがあったんだ。まるで俺ん家の近所みたいだ」

いかにもお年寄りばかりが住んでいそうなアパートを俺は見つめた。

足立区や葛飾区では珍しくない、二階だての細長いアパートだ。ドアが並んだ通路に洗濯機や自転車がおかれている。外階段で上がる二階もまったく同じ造りで、各階四部屋、八戸の造りだ。

俺が住むマンションの斜め向かいにも、そっくりなアパートがあった。部屋は十あったが、使われていたのは三戸だけだった。ある日囲われ、とり壊されて、一週間後にはコインパーキングになっていた。コインパーキングになると、そこにかつて十世帯が住める住宅があったとは思えないくらい、狭い土地だった。

「千代田区とかを別にすれば、東京はどこにでもこういうところがあるよ。減ってはきているけどね」

東京生まれ東京育ちのミヤビはいった。

「で、問題の建物は？」

俺が訊ねると、

「あっち」

とミヤビが路地の先を指さした。古い一戸建てやアパートに混じって、妙に新しい造りのマンションや家がぼつりぼつりとあるが、高さが規制されているのか、五階だて以上の建物は無い。

「あれ」

ミヤビが示したのは一階に美容室の看板がでた建物だった。「美容室　じゅえりー」と記されているが、営業はしていないようだ。窓にはカーテンがかかり、「テナント募集中」の貼り紙が扉にある。

美容室の横に建物の入口があった。手前に集合式の郵便受があり、薄暗い奥に階段が見える。オートロックはない。

ミヤビはあたりを見回し、入口をくぐった。俺もあとにつづいた。

金属製の郵便受の前で、

「写真撮って」

小声でミヤビがいった。一階には潰れた美容室しかないが、二階から上には住人がいるようだ。俺は急いでカメラをだすと、郵便受の写真を撮った。箱には「201」とか「402」という番号札はついているが、住人の名はでていない。

各階二部屋で、五階までのようだ。

はみでるほどデリバリーメニューがつつこまれた郵便受は、おそらく使われていない部屋のも

のだろう。

二階から五階までの八部屋のうち、そういう郵便受が三つあった。

手早く写真を撮った俺はカメラをおろした。湿ったコンクリートと消毒薬のまじった臭いがどこかなつかしい。

お袋が親父と離婚する前、埼玉の団地に住んでいたことがある。そこでよく嗅いだ臭いだった。

「上がるよ」

ミヤビが小声でいった。

「ちょっと待った」

俺はいつて建物をでると、美容室の扉の貼り紙を写した。不動産会社の名と電話番号が記されていたのだ。

「よしいこう」

戻って俺はいった。ミヤビが小さく頷き、階段を上った。踊り場の天井にはむきだしの蛍光灯が一本あり、点灯しているのに、あたりは暗く感じられた。

踊り場をはさんだ階段の先には、朱色に塗られた金属の扉がふたつ並んでいた。表札はでない。

俺は素早くシャッターを切った。フラッシュはたかない。

三階、四階、五階と同じ造りになっている。五階の先にも階段があり、俺たちはそれを上った。建物の中は静かだった。物音はまったくしない。意外としつかりした造りなのか、住人全員がでかけているのか。

五階の上の踊り場を先に曲がったミヤビが足を止めた。

追いついた俺も立ち止まった。屋上につづく階段に、ベニヤ板でバリケードが作られていた。

「屋上立入禁止 無断で入った場合、警察に通報します。拔海不動産」

と書かれた貼り紙がある。俺はバリケードの写真も撮った。拔海不動産というのは、下の美容室の扉の貼り紙に記されていたのと同じ不動産会社の名だ。

ミヤビがバリケードに近づき、手で押した。

ベニヤ板がたわんだ。力を入れれば外れそうだ。

「行き止まりか」

俺はいった。

ミヤビはバリケードを見つめていたが、バッグから携帯をとりだした。貼り紙を見ながら携帯を操作し、耳にあてる。

「あ、拔海不動産さんですか。お忙しいところを恐れいたします。わたし、六本木七丁目アパートを探している者です。七丁目××のローズビルは、お宅が管理されているのでしょうか」

はいはい、と相手の質問に答え、

「そうなんです。ちょうど七丁目を歩いていたら、一階の美容室さんのところでお宅の貼り紙を見まして。空いている部屋がありそうなので、紹介していただけないかと思ってお電話しました」

俺は感心してミヤビを見つめた。立て板に水だ。

「はい、ではそちらにうかがえばよろしいですね。どちらに？ はい、はい。わかります」

最後に礼をいって、ミヤビは携帯をおろした。

「不動産会社は麻布十番にあるみたい。いこう」

階段を降り、建物をでた。でるときに改めて確認すると、「ローズビル」という小さなプレー

トが入口の横にあった。

麻布十番へは六本木から地下鉄でひと駅だ。

ミヤビが「部屋を探している」と嘘をついたことを責める気持は、俺にはなかった。昭和六十年のできごとを調べていると真実を告げたところで、おいそれと不動産会社の人間が協力してくれる筈もないからだ。

第一、四十年前のことを知っている人間がいるかどうかすら怪しい。

拔海不動産は、麻布十番の駅から韓国大使館のある仙台坂の方角に少し歩いた場所にあった。

古い雑居ビルの一階で、ガラス戸に金文字で「拔海不動産」と書かれた、たたずまいからして、老舗の不動産屋という印象がある。

ガラス戸の外から中をのぞきこんだミヤビが、

「ラッキー」

とつぶやいた。

「何がラッキーなんだよ」

訊ねた俺に、

「お爺ちゃんがいる。あの人なら四十年前のことも知ってそうじゃない」

とミヤビは答えた。

言葉通り、机と応接セットのおかれた店内には、七十くらいに見える男がいた。白いワイシャツにネクタイをしめ、毛糸のベストを着けている。七・三に分けた白髪頭を見て、俺は高校の古文の先生を思いだした。

店内に他の人間はいない。古文の先生は鼻先の眼鏡ごしに机に広げた新聞を読んでいる。

「ごめん下さい」

ミヤビがガラス戸を引いた。古文の先生は上目づかいでこちらを見た。

「先ほどお電話をした者です」
一拍おいて、

「ああ、ローズビルの——」

と、低くて通る声で先生は答えた。

「そうです」

また間が空いた。先生はミヤビを見つめ、次にうしろに立つ俺を見た。

「まあ、お入りなさい」

先生はいつて、入口に近い、古い応接セットを示した。長椅子は黒い革張りだが、あちこちに白いひびわれがあって、ガムテープで補強されている。抜海不動産の景気はあまりよくないよう
だ。

「失礼します」

ミヤビはいつて、腰をおろした。俺も隣にすわる。

「えーと、お名前は？」

先生は机の前にすわったまま、訊ねた。

「穴川です」

「ご夫婦？」

俺を見た。

「友だちです」

俺は首をふった。よけいなことはいわないほうがいいだろう。

「部屋探しを手伝ってもらっていい」

ミヤビがいい、つけ加えた。

「住むのはわたしひとりです」

先生は頷き、訊いた。

「あそこらに住みたいの？」

「はい。昔から六本木に住むのが夢で。でもあんまり高い家賃はだせないんです」

「ローズビルね。古いんだよね、あそこは」

先生はいつた。

「確かにそんな感じがしました。築四十年くらいですか？」

ミヤビが訊ねると、先生は首をふった。

「いや、五十年以上。六十年近いかな」

「そんなに古いんですか。建物はしっかりしているように見えましたけど」

「うん。建物はしっかりしている。昔のほうが、鉄筋とかちゃんと入れているからね」

「じゃあ住めますね。空いている部屋があるみたいでしたけど」

「あるにはある。でもあそこじゃなくても、もっと新しいアパートがあるよ」

「ちなみに家賃はいくらなんですか」

ミヤビが訊くと、先生は唸り声をたてた。

「今は新しい店子たなこを入れてないからね。住んでいる人のほとんどは二十年以上いる人ばかりだ」

「あの、ローズビルはお宅のちものなのですか」

俺は訊いた。

「いやいや、オーナーさんは別にいるけれど、うちが管理を任されているんだ。全面的にね」
全面的にとつけ加えるあたり、食えない感じがする。

「で、おいくらなんでしょうか」

先生は再び唸った。

「本当にあそこに住みたいのかい？」

「家賃によっては」

ミヤビが答えた。先生は息を吐いた。

「オーナーさんはもう、新しい店子を入れたくないらしいんだ。建物はしっかりしているけれど水回りとかはガタがきているんで、いろいろ文句をいわれても困るといふことで。家賃はね、六万五千元」

「バストイレつきですか」

思わず俺はいった。六本木でそれなら、かなり安い。

「一応ついているよ。古いユニット式だけど」

「借りたいです」

ミヤビがいった。

「そうかね」

先生は困ったようにいった。

「何階が空いているんですか」

俺は訊いた。

「えーと、三階ひと部屋に五階ふた部屋かな」

「五階がいいです。今いるところは、上の階の人の足音がうるさくて」

ミヤビがいった。

「でもエレベーターはないよ」

「知ってます。上がってみましたから」

ほう、というように先生はミヤビを見た。入ったことを責めている顔ではなかった。

「五階から上はバリケードみたいなのがあったんですが」

ミヤビがいうと、先生は頷いた。

「屋上にあがる階段ね」

「屋上にはでられないのでしょうか」

ミヤビは訊ねた。

「でられなくはないのだけど、ほら、あのビルはオートロックじゃないから、外から人が入ってこられる。勝手に屋上とかに上がられても困るからね」

「でも扉とかあるんですよね。階段を上がったらすぐ屋上というわけではないのでしょうか？」

ミヤビの問いに先生は頷いた。

「もちろんドアはあるよ。ただもうガタがきててうまく閉まらないんだ。それでああいうふうになっている」

「そうなんですか。じゃあ住んでも屋上にはでられないのでしょうか。眺めがよさそうだなと思つたのですけど」

「確かに眺めはいいよ。あのあたりは大きな建物がないからね」

先生は答えた。

「見せてもらうわけにはいきませんか」

ミヤビはいった。

「見られるのなら見たいです」

間が空いた。

「あのバリケード、けっこう頑丈なんですか？」

俺は訊ねた。

「いや、ベニヤをテープで固定しただけだから外すのは簡単だ」

先生は首をふった。

「見てきちゃ駄目ですか。バリケードは元に戻しておくんで」

俺はいった。

「六本木に住んで、屋上でランチしたりするのが夢なんです」

ミヤビがいつて先生を見つめた。

「オーナーさんが何ていうかだね。新しい店子を入れることも含めて」

先生はいった。

「訊いていただけませんか？」

ミヤビがいうと、先生はちらりと壁にかかった時計を見た。

「まあ、いいけど」

「オーナーさんて、あのローズビルに住んでいるのですか」

俺は訊ねた。

「いやいや。別の場所だ」

「ローズビルの昔からのもち主なんですか？」

ミヤビが訊ねると、先生は頷いた。

「ずっとかわってない。昔は外国人とかも住んでてね。アメリカ人に人気があった」

「アメリカ人が住んでいたのですか」

「あの近くに『スターズ・アンド・ストライプス』があるからね」

先生の口からいきなり英語がでてきて、俺は思わず訊き返した。

「スターズ何ですか？」

「ストライプス。星条旗のことだよ。米軍がだしている新聞の名前だ」

「え、米軍の新聞社が六本木にあるんですか」

「星条旗新聞ですね」

ミヤビがいった。俺はミヤビを見た。

「知ってたんだ」

「あの少し先、西麻布にしあきぶのほうに向かったところにあるのは知ってた。よくヘリコプターが飛んでる」

ミヤビは頷いた。

「そうそう。米軍基地といききするヘリがよく飛んでる」

先生はいった。

「今はもうアメリカ人は住んでいないのですか」

ミヤビが訊ねた。

「今はいないよ。米兵は宿舍が基地の中にあるし、ビジネスで日本にくる人は、もっと高いところに住む」

答えて、先生は机の上の電話機に手をのぼした。受話器をとり、ボタンを押す。

「あ、もしもし。ごぶさたしております。麻布十番の抜海不動産です。どうも、どうも。久しぶりです。実はこちらに、ローズを借りたいという方がみえてまして……」

俺とミヤビは黙って先生を見つめた。

「ええ、ええ。若い方です。女性です。いや、そういう感じではないですな」

電話に答え、先生はミヤビに目を向けた。

「失礼ですが、お仕事は何をされていますか」

「ライターをしています。雑誌などに記事を書く仕事です」

不動産屋で職業を訊かれ、ライターだとかイラストレーターと答えると、たいてい引かれる。

サラリーマンとちがって定収入がないからだ。

俺は先生とオーナーのやりとりの想像がついた。若い女が借りたがっていると聞いて、オーナーは「水商売の女性か」と訊ねたにちがいない。

「ライターだそうです」

先生はオーナーに告げた。はい、はい、と答え、

「いや、それは何も。ただ屋上を見たいといわれてて。ええ。まあ、そうなんです。屋上ですか？　うちが階段にバリケードをおいたままなので、でられません。はい」

「はい、はい、わかりました」

告げて電話を切る。

「オーナーさんにもすぐには決められないようなので、申し込み書を書いていただけますか」
机のひきだしから紙をだした。ミヤビに渡す。

住所、氏名、職業、連絡先などを書きこむ用紙だ。

「はい」

ミヤビは頷き、ペンを手にした。名前や住所などを書きこみ、「年収」の欄には、少し考え「五百万円」と記した。「籠城の鬼」が売れたので、もっとある筈だが、真実を書くとかえって怪しまれると考えたのかもしれない。

ミヤビが記入した申し込み書を受けると先生はいった。

「オーナーさんの返事がもらえたら、連絡します」

「どれくらいかかりますか」

ミヤビが訊ねると、先生は首をひねった。

「まあ、一日か二日のうちには返事があると思うがね」

よろしくお願いします、とミヤビが頭を下げ、俺たちは「抜海不動産」をでた。

「どうする？」

俺はミヤビを見た。

「ローズビルに戻って、住んでいる人に話を訊く」

「わかった」

俺たちは六本木に戻った。ローズビルの郵便受で、現在使われていそうな部屋を確認する。201、202、301、401、402、の五部屋だ。

「あたしが話をする」
ミヤビはいつて階段を上った。二階の201号室の扉のかたわらにあるインターホンのボタンを押す。

ピンポン、という音が扉の内側で聞こえた。しばらく待ったが、返事はない。
隣の202号室のインターホンのボタンを押した。

「——はい」

年配の女性の声に応えた。

「突然、恐れいります。昭和六十年にこちらで亡くなられた方について調査をしている者です。さしつかえなければ、お話をお聞かせ願えないでしょうか」

ミヤビが告げた。

「いつだって？」

とまどったように女性は訊き返した。

「昭和六十年です。一九八五年。そのとき、こちらにお住まいだったでしょうか」

「いないね」

ぴしゃりと女性はいった。

「あたしがここに移ってきたのは平成元年だからね。いなかった」

「それは失礼いたしました。あの、お隣の方は、今日はおでかけでしょうか」

「隣？ 知らないね。男のくせに昼間からふらふらしているような手合いだからね。つきあわないことにしてる」

「若い方なのですか」

「若いよ。そんな昔のことはきくと知らないね。ここにきたのは、あたしよりあとだから」

「そうですか。古くからここにお住まいの方をご存じありませんか」

「三階の竹本たけもとさんは、あたしより前からここにいる。他の人は知らない」

「わかりました。ありがとうございます」

俺とミヤビは頭を下げ、階段に向きをかえた。

そのとき202号室の扉が音をたてて開いた。白髪頭にネットをかぶった女性が、チェーンロックのすきまからこちらを見た。八十歳くらいだろう。小柄で、ひどく瘦せている。

「どうも」

俺はいつて頭を下げた。女性の顔にはありありと疑いの色が見えた。

「何の調査だい」

つつけんどんな口調で女性はいった。

何と答えるだろう。俺はミヤビをふりかえった。

「都市伝説です。東京、六本木に伝わる都市伝説について調べています。このビルの屋上で人が亡くなったという話を聞かれたことはありませんか」

ミヤビは女性を見返し、いった。

「人が死んだ？ 五階にいたのが、二十年くらい前かな、救急車で運ばれてそれきりつてのがあったけど」

女性は顔をしかめた。

「屋上です。屋上で人が亡くなっているのが見つかったんです。それが昭和六十年のことです」
「そんな昔のことは知らないね。でも、ここは年寄りばかりだからね。いつ誰が死んでもおかし

かないけどね」

口調は荒いが、特に悪意は感じない。もともと歯切れよく喋る女性のようだ。

「三階にいらつしやる竹本さんもご年配の方なのですか」

ミヤビが訊ねた。

「あたしよりは若いよ。今いってもいないよ。仕事してるから」

「お仕事？」

「コックだよ、ラーメン屋の。西麻布に昔からある『珍栄』で店で働いてる」

「『珍栄』ですね。ありがとうございます」

「いくんなら、ラーメンはやめときな。麺がぶつとくて食べられたもんじゃないから」

ラーメン屋でラーメンが駄目といわれたら何を食べればいいのだ。

が、女性の顔は真剣だった。

「わかりました。ありがとうございます」

ミヤビは答え、頭を下げた。扉がガチャンと音をたてて閉まった。

俺たちはローズビルをでた。まだ四階のふた部屋が残っているが、まずは「珍栄」の竹本というコックに会いにいつてみることにした。時刻も午後一時近くで、腹も減っている。

携帯で調べると、「珍栄」は、裏通りを西麻布の方角に向かった場所にあった。

途中、表通りの反対側にたつフェンスに囲まれた大きな施設をミヤビが指さした。

「あそこが『星条旗新聞社』」

新聞社というには殺風景な造りで、米軍の施設といわれてもピンとこない。建物の外を歩いている人の姿はなかった。車が何台か止まっているだけだ。

「入ったことある？」

俺が訊くとミヤビは首をふった。

「あるわけない。入口にはいつも警備員が立ってる」

「警備員で、アメリカ兵？」

「アメリカ人ばかりはないな。日本人かな。でもテロの警戒が厳しかった頃は、鉄砲ぶらさげてた会社にいたときに、向かいのマンションにデザイナーの事務所があつて打ち合わせによくきてたんだ」

「日本人の警備員に銃をもたせていたのかな」

「さあ。そこまではわからない。日系アメリカ人だったかもしれないし」

話しながら歩いているうちに「珍栄」に到着した。202号室の婆さんはラーメン屋といったが、中華料理屋だ。向かって右隣りが鮎屋、左隣りが酒屋だが、三軒ともかなり昔からやっている雰囲気だ。

赤地に白く「中華」と染め抜いたのれんを俺たちはくぐった。

「いらつしやい！」

という声とともにカンカンと中華鍋を打つ音が聞こえてきた。

四人掛けのテーブルが四つと、厨房に面したカウンター席が五つの、小さな店だ。テーブル二つとカウンター席ひとつに客がいる。

「カウンターにすわろ」

ミヤビがいつて、さっと腰をおろした。

「あら、いいの？ そつちで」

白い上つ張りを着たおばさんがいった。顔も体も丸っこくて、声大きい。

厨房の中では、やはり白い上つ張りを着た、痩せた男が鍋を振っていた。

「こつちがいいんです」

ミヤビがいうと、はいはいとおばさんは頷き、水の入ったコップを俺たちの前においた。

考えてみると、きのうも餃子と炒飯を食べている。そこは避けたいと思いつながら、俺は壁に貼られた短冊メニューを眺めた。

「アンかけ硬焼きソバ」

ミヤビがいった。

「俺は肉野菜炒め定食」

「はい。硬焼き一丁、野菜炒め一丁」

おばさんが厨房に声をかけた。

「硬焼き一丁、野菜炒め一丁」

痩せた男はくり返し、中華鍋を前後に振った。鍋の中の炒飯がまるで生きもののようにお玉の中に飛びこんでいく。そのお玉を横に動かし、くるりとかえすと、皿にこんもり丸く炒飯が盛られていた。

「すごいな、熟練の技つてやつだ」

俺はいった。男はこちらのほうを見もせず、

「四十年やってるからね」

といった。白の上つ張りの下は、今どきあまり見ないランニングシャツだった。

「このお店、そんなに長いんですか」

「もうじき六十年。先代が二十年やったところで体壊したんで、俺が助っ人です」

洗った中華鍋に油をしき、肉と野菜を投げ入れて男は答えた。

「すごい」

ミヤビが甘ったるい口調でいった。

「今、町中華ってブームなんですよね」

「うちもテレビにでてくれて頼まれたけど断った」

「え、なぜです？」

「テレビにでると、いつときはわつとお客さんがくるが、すぐに引く。その間、常連さんに迷惑かけちゃう」

男は手を動かしながら答えた。

「はい炒飯」

スープレの碗と炒飯の皿がカウンターにおかれた。ひとりだけカウンターにいた客の注文だったようだ。携帯でマンガを読みながら炒飯を食べ始める。

「実はこの辺に住もうと思って、部屋を探しているんです」

ミヤビがいうと、男は初めてこちらを見た。色が黒くて、ぎょろりとした目をしている。

「このことも不動産屋さんで聞いてきました」

ミヤビはいった。男は表情をかえず答えた。

「アパートはたくさんある。俺が住んでるところも部屋は空いてる」

「この近くなんですか？」

「いの——」

とって、男はお玉で左をさした。

「上にあがっていったところだ。歩いて四、五分」

「家賃高いですか」

「高くないよ！ 古いから」

「え、何ていうマンションですか」

「ローズビル」

「さっき見たとこだ」

俺はすかさずいった。

「屋上に入れなくなってた」

「ああ、あそこ。眺めがよさそうなのに、何で上がれないのって思ったんだ」

ミヤビが話を合わせた。

「屋上な。昔は上がれたんだ」

調理に戻った男がいった。肉野菜炒めに調味料を入れると、炎が上がった。

「なんで入れなくなっちゃったんですか」

ミヤビが訊ねた。男は答えかけ、首をふった。

「なんでかな。もうだいぶ前から入れなくなってる」

あまり喋ってはマズいと思ったようだ。

「なんか事故でもあったのかな。まさか飛び降り自殺とか」

俺がいうと、

「いや、そんなんじゃない。俺はもう四十年以上住んでるけど、自殺なんてなかった」

男が井にご飯をよそいながらいった。

「勝手に人が入るのを防ぐためじゃないの。ほら、誰でも上がれちゃうからさ」

肉野菜炒めとスープ、タクアン二切れの入った小皿と丼飯を俺の前においた。

別の鍋で作ったアンを、皿の上にのせた硬焼きソバにかける。

肉野菜炒めに俺は箸をのばした。味が濃くて、ご飯によく合う。

「おいしい」

俺はいつて、男に訊ねた。

「ここは何時までやってるんですか」

「夜？ 夜は九時半ラストオーダー、十時閉店だ」

「その間ずっと休みなしですか」

「二時から五時までは休む。あんたらテレビ局の人か」

「え？」

「いろいろ訊くからさ。でないよ、テレビには」

「ちがいます、ちがいます」

ミヤビが首をふった。

「本当にこの辺に住みたくて、いろいろ訊いて回ってるんです。抜海不動産さんにもいきました」

「抜海？ ああ十番のね」

いつて男は鍋を洗い、前かけで手をぬぐうと、上っ張りのポケットから電子煙草をだしてくわえた。俺たちのあとからきた客はおらず、仕事が一段落したようだ。

「わたし、ライターもしているんです。このあたりを書くかと思って。六本木とか西麻布

にも派手なばかりじゃない場所があるって、知らない人に教えてあげたいんです。それでいろいろ見たり訊いたりしていて」

ミヤビはいった。

「ふーん」

男はあまり信じていないような口調でいった。ミヤビは箸をおき、ショルダーバッグから名刺をとりだした。カウンターと厨房の仕切りの上におく。

「あの、この辺にお詳しいようなので、あらためてお話をうかがわせていただくわけにはいきませんか。わたし、ライターの穴川と申します」

名前と携帯番号、メールアドレスが入った名刺だ。

「もしお話を聞かせていただけるなら、些少さしょうですがお礼もします」

「あんたは？」

男は俺を見た。

「イラストレーターです。今は彼女の仕事を手伝っています」

「つきあってんの？」

男はしばらくと訊いた。

「いえ、同級生なんです」

「あんたの名刺は？」

いわれ、俺も名刺をだした。裏にイラストが入っている。

男は手にとり裏返して、

「これ、あんたの絵かい？」

と俺を見た。俺は頷いた。走る、投げる、打つ、跳ぶなどの姿をデフォルメし、コマ割りして印刷したものだ。

「うまいもんだ。なるほど、ライターさんに絵描きさんか。あんたの名前は五頭ごづ？ 珍しいな」

「そうなんです」

「ペンネームかい」

「いえ、本名です」

「頭がよさそうな名前だよな」

いって男ははっはっはと笑った。笑うときよる目が細くなって、印象が変わる。

「俺は竹本ってんだ。お礼がでるって本当かい？」

ミヤビに目を戻した。ミヤビは頷いた。

「はい、本当に少しですけど」

「まあいいや。じゃさ、二時過ぎたらここにまたきてよ。そうしたら話すから」

「ありがとうございます」

俺とミヤビは声を合わせた。

残さず昼飯を平らげて、俺たちは「珍栄」をでた。二時まであと十分かそこらだ。

酒屋の前の自動販売機で缶コーヒーを買い、少し離れた場所に立って時間を潰した。

ミヤビがバッグから小さな熨斗袋のしをだした。中身を確かめる。

「そんなの、いつももってんのか」

俺が訊くと頷いた。

「うん。取材謝礼を渡すのに、いちいち財布からだすわけにいかないもん。五千円と一万円入れたのを二組ずつもってる」

俺は「珍栄」のほうを見やった。

「どっち渡すんだ？」

「とりあえず五千円のほう。領収証ももらう」

つまり領収証もち歩いていてということだ。俺は感心した。

「準備は怠りないってわけか」

ミヤビは首をふった。

「想一の名刺がきいた。あたしだけだったら信用されなかった」

名刺の裏にイラストを入れろとアドバイスしたのはミヤビだった。

二時十五分になるまで待って、俺たちは「珍栄」にひき返した。のれんが下げられ、ガラス戸ごしにのぞいた店内に人はいない。

ミヤビがガラス戸をノックした。奥から竹本が現われた。上っ張りの上にジャンパーを羽織っている。

ガラス戸の鍵を開けてくれた。

「入んな」

店内の灯りは消されている。

「十分くらいな。パチンコいきてえから」

腕時計をのぞき、竹本はいった。

「はい。軍資金の足しにして下さい」

ミヤビが熨斗袋をだした。

「いくら入ってんだ」

「五千円です。少なくてすみません」

「いいよ。話を聞いて、役に立ったらもらう」

竹本は熨斗袋には触れず、いった。

「わかりました。ありがとうございます」

押し問答はせず、ミヤビはバッグからICレコーダーとノートをだした。

「ノートをとりませんが、録音もさせて下さい」

「はいよ」

「竹本さん、おいくつですか」

「七十四」

俺は見直した。そんな年には見えない。

「六本木七丁目のローズビルにお住まいだと先ほどかがいましたが、そちらには何年いらっしやるのですか」

「え、何年かな。二十一のときに新橋しんばしの、今はなくなつた中華料理屋で働きだして、そこを三十で辞めたあとだから四十四年か」

「そんなに!？」

「ああ。ずっと独り者だし、若いときは麻雀屋マージャンで半分暮らしてるようなもんだつた。先代にここを頼まれたとき、引越してきたんだ」

「その頃と今とでは、六本木もずいぶんちがつたのじゃないですか」

「ちがったね。今のほうがガキが多い。昔は、まあ俺も若かったからそう感じたのかもしれないけど、金をもってそうな大人が多かった。あとは学生でも、ボンボンって感じのとか、芸能人とかスポーツ選手だな。あまり知られてない高級レストランが六本木にはけっこうあってさ」
「ローズビルにもそういう人が住んでいました？」
「いやいや、そんな高級なとこだったら俺は住めないから」
竹本は手をふった。

「あそこはさ、昔、どこかの寮だったみたいなんだ。一階は店で二階から上に八部屋だろ。できたのは俺が入るより十年近く前で、その頃には六本木にももう、もったこときれいなマンションがいっぱいあった。エレベーターなしってのは、当時でも珍しかったからな」

「バブルの前、ですよね」

俺はいった。

「前だよ。景気は悪くなかったが、あんなに土地の値段とかは上がってなかった」

「その頃はどんな人が住んでいたんです？」

「あそこか？ 水商売が多かったな。俺みたいなコックもいたし、あとはディスコのマネージャートかな」

「外国の人もいたって聞きましたけど」

「いたいた。正体不明のアメリカ人だ。日本語がペラペラで、よく夜中に女を連れこんだりしてた。陽気な奴で、会うと『ハイ』なんて手を振っちゃってさ」

「今も六本木は外国人が多いですが、その頃もいたんですね」

「今はさ、アジア系やアフリカ系もたくさんいるだろ。当時は、外国人つったら、だいたい白人

だった。あと、横須賀^{よこすか}に空母が入ると、わっと水兵が遊びにくるんだ。六本木が急に若いアメリカ人だらけになったもんだ」

「何しにくるんです？」

「まあ観光っていうか、遊びだな。アメリカ人たって、若い兵隊なんてだいたい田舎者だ。だから東京の派手な街にあこがれてやってくるのさ。たいして金をもつてないから、ファストフードや安いディスコにたまってたな」

「屋上に入れなくなったのも、そのせいですか。アメリカ兵が勝手に上がっちゃったとか」

「屋上？ あれはホームレスだ」

いってから、竹本はしまったという顔をした。すかさずミヤビがくいついた。

「ホームレスが勝手に屋上に住んでたんですか」

「住んでたのかどうかは知らないけど……」

「もしかして屋上で死んでたとか」

俺はいった。竹本は渋い表情になった。

「俺もよくは知らねえんだ。見つけたのは、五階にいた占い師でさ」

「占い師？」

「もう今はやめちまったが、六本木交差点の近くで、占いをやってたおばはんがいてな。それが洗濯物を屋上に干しにいつて見つけたんだ」

「その占い師の方は今もローズビルに住んでいらっしやるんですか」

「いや、十年以上前に店をたたんで、引っ越してったよ。でもこのあいだ図書館で見かけたな」

「どこの図書館です？」

「赤坂図書館だよ。青山一丁目あおやまいちじょうめのそばにある。本を借りにいったときにいたんだ」

「竹本さん、本、お好きなんですか」

「時代ものが好きなんだ。チャンバラ小説な。今、テレビでも時代劇ってほとんどやってないだろう。だから本で読んでる」

「図書館にはよくいかれるんですか」

「いや、本当に暇で、パチンコいくにも金がないときくらいだな。その婆さんは、しょっちゅうきてるみたいで、図書館の係とも立ち話してた」

「六本木で古い師をやっていたのなら、いろんな話をご存じでしょうね」

「図書館にいけばきつといるよ。話を聞いてみたらどうだい」

「お名前はわかります？」

「何だったかな」

竹本は顔をしかめた。

「占いやつてた店の名は覚えてるんだがな」

「何という店ですか」

「蓮華堂れんげどう ってたんだ」

「蓮華堂」

「ほら、ハスの花を蓮華っていうだろ。それからとつたみたいだ。婆さんの名は覚えてないな」

「いくつくらいの方ですか？」

「俺より上だから、もう八十くらいになるのじゃねえの。いっつも、首飾りとかいっばいさげた派手な格好してて、見かけたときもかわってないなって思った」

「派手なお婆さん」

「そう、昔の教育ママみたいな眼鏡かけてて、ぱっと見、意地悪そうだ」

「意地悪なんですか」

俺が訊くと、竹本は首を振った。

「かわつちやいたが、根性は別に悪くなかったよ」

竹本は腕時計を見た。

「昔の六本木のことば『蓮華堂』の婆さんに聞くといいよ。赤坂図書館にきてたつてことは、今もこの辺に住んでるつてことだろうからさ」

「わかりました。いろいろありがとうございました」

ミヤビはいつて、再び熨斗袋をだした。

「いいのかい、本当にもらっちゃって」

「とても参考になりましたから」

「本当かよ。じゃあ、ありがたくもらつとく」

いつて、竹本は熨斗袋をジャンパーのポケットに押しこんだ。

「すみません。領収証いただけますか」

ミヤビが領収証とボールペンをさしだした。名前と住所、日付を書かせる。竹本は嫌な顔もせず書いた。

「これ、出版社かなんかに渡すと、払ってもらえるの？」

「そうなんです」

「じゃ、ゼロいつこ増やすか」

「いえいえ。そんな」

「冗談だよ」

竹本は笑い、

「あ、思い出した。『蓮華堂』の婆さん、渡辺^{わたなべ}って名前だった。下の名までは忘れちゃったが、渡辺^{わたなべ}って書いた紙をドアに貼ってたんだ」といった。

「渡辺さんですね。助かります。ありがとうございます」

「ミヤビがいつて頭を下げた。俺たちは「珍栄」をでた。竹本が内側からガラス扉の鍵をかけた。どうする？ ローズビルに戻るか、それとも図書館か」

俺が訊くと、

「図書館。ローズビルは、夜にいこう」

とミヤビは答えた。

今いる西麻布からだと言山一丁目まで、歩いて三十分くらいの距離だ。

「いつて、すぐ見つかるかな。昼間の図書館でお年寄りが多そうだ」

歩きだして俺はいった。

「多くても、八十代でネックレスいっぱいつけた女の人はそういないのじゃない」

確かにそうかもしれない。それにお年寄りは、生活習慣をあまりかえないものだ。朝起きて何をして、朝食のあとはこれをし、午後はこうして過ごす、というのがたいてい決まっている。じいちゃんを見ていて、俺はそれを知った。

その渡辺という古い師の女性が赤坂図書館を頻繁に利用しているなら、たとえ短時間でも、毎

日顔をだす可能性は高い。

図書館には、本だけでなく、新聞や雑誌などもおいてある。新聞を読み毎日図書館に行く人を俺は知っていた。代金がかからないし、捨てる手間もなくていい。だから新聞は図書館で読むに限るといふのだ。

西麻布から乃木坂^{のぎさか}にでて、外苑東通りを北に向かった。六本木から地下鉄に乗れば青山一丁目までひと駅だが、歩いたほうが早いとミヤビがいったのだ。

図書館ということで、何となく古い学校のような建物を俺は想像していた。が、赤坂図書館はタワーマンションの三階にあった。一階には小さなスーパーマーケットもあり、俺が知っている公共図書館とは、たがずまいがまるでちがう。

ビルのワンフロアなので、それほど大きな施設ではなく、すぐにひと回りできる。新聞雑誌コーナーには、お年寄りが多かったが、派手な格好の女性はいない。

俺たちは顔を見合わせ、図書館をでた。

「そう簡単にいくわけではないよな」

俺はいった。ミヤビは無言で携帯を操作した。やがて、

「あった」

といった。

「『蓮華堂』って占いの店、今もある」

携帯の画面を俺に向けた。

「どこに?」

「赤坂八丁目。このすぐ近くのマンションで営業してるみたい」

「六本木をたたんで赤坂に移ったってことか。営業時間は？」

「えーと、月、水、金の、午後二時から六時までで、要予約となってる」

今日は火曜日だ。ミヤビは携帯を耳にあてた。少しして、

「留守電になってる」

と携帯をおろした。

「でも営業してるのなら、図書館で張りこまなくても、話を聞けるってことだろ」俺はいった。

「確かにアポイントはとりやすい」

ミヤビが領いたとき、その手の中で携帯が鳴った。電話がかかってきたのだ。

「はい。穴川です」

応えたミヤビの目が広がった。

「あ、はい、そうです。ローズビルの入居申し込みを書いたのはわたしです」

ローズビルの関係者からの電話のようだ。抜海不動産からの連絡をうけ、かけてきたにちがいない。

「はい、そうです。できれば入居したいと。ただ、あのう、屋上なんです、入居しても上がれないのでしょうか。えっ、はい、本当ですか!？」

ミヤビの顔が輝いた。

「ええ、ええ。それはもちろん。必ずそうします。はい。ありがとうございます。それではまたご連絡をお待ちしております」

電話を切り、

「見ていいって。バリケードを元に戻しておいてくれるなら、屋上に上がってもかまわないって。ローズビルのオーナーが」

と明るい口調でいった。

「オーナーってどんな感じだった？」

「喋りかたはいていねいだった。男の人で、若いのかな。声が高くて、ちょっと年齢の見当がつきにくい」

「六十年近く前からあるビルのオーナーなのだから、若いってことはないのじゃないか」

「二代目ってこともあるでしょう。親が亡くなって相続したとか」

「そうか。だとしたらいいご身分だな。六本木のビルを相続できるなんて」

俺がいうと、ミヤビは首を傾げた。

「売ればお金になるだろうけど、今住んでいる人を追いだすことになるし、不動産屋さんもいつてたように水回りとかが古くなっているから、大家さんとしてはやらなけりゃいけないことが多いって大変なのじゃない」

「そうか。一概にいいご身分とはいえないか」

ミヤビは時計をのぞいた。午後三時を回った時刻だ。

「明るいうちにローズビルにいったって、屋上に上がるうよ」

「了解」

俺たちは再び六本木に戻った。ローズビルの階段を上がり、五階から先の踊り場に立つ。ベニヤ板のバリケードは、ガムテープで壁に固定されているだけの代物だった。

俺とミヤビはガムテープを慎重にはがした。

上下左右、全部で六カ所に貼られたガムテープをはがすと、ベニヤ板の一枚が外れ、屋上へとつながる階段が現われた。上りきった先には、朱色の金属扉がある。

俺たちは顔を見合わせた。四十年前とはいえ、その扉の向こうで人が死んだと考えると、何となく不気味だった。何年も使われていないからだろう。階段にはほこりがたまっている。

「でも、よく許可してくれたな、屋上に上がるのを」

「すぐには階段を上がりづらくて、俺は小声でいった。

「ね。あたしもそう思う。もしかすると——」

いいかけ、ミヤビは言葉を止めた。

「もしかすると?」

俺が訊き返すと、首をふった。

「いや、たぶん気のせい。いこう」

「わかった」

俺は先に階段を上がった。抜海不動産の先生がいったように、屋上へとつながる扉はきちんと閉まっておらず、ドア枠とのすきまから細い光がさしこんでいる。そのせいで、階段の暗さともあいまって、まるで異世界につながる扉のようだ。

が、そんなわけはなく、階段を上りきった俺がノブを押すと、ギイイという軋みをたてて扉は開いた。

バタバタバタツという羽撃きの音が聞こえた。扉の向こう側に何羽かの鳩がいて、驚いて飛びたつたのだ。

正面にフェンスが見えた。左手は鉄の柱で、その上に給水タンクがのっかっている。

コンクリートの上に合成樹脂をしきつめた屋上に俺たちは立った。ところどころに水たまりができている。

「わあ。いい眺め」

ミヤビがいった。確かに周囲に大きな建物が無いせいで、意外なほど見はらしがいい。

六本木ヒルズとその手前にあるいくつかのタワーマンションをのぞけば、西麻布にかけての街が一望できる。

俺はカメラをかまえた。まず屋上から見える景色を左右少しずつずらしながら撮っていく。右手にはミッドタウンが、左手にはヒルズがあり、その中間が西麻布へと下りていく道だ。「スターズ・アンド・ストライプス」の建物も見えた。

つづいて屋上の写真を撮る。屋上は四方を二メートルほどの高さがある金網のフェンスで囲まれ、半分が給水タンクの土台で占められていた。

フェンスには枯れた蔦がからまっていた。そのフェンスと給水タンクの土台とのあいだに細いロープが二本張られていて、割れた洗濯バサミがいくつも落ちている。洗濯物を干すのに使った人間がいたようだ。

ロープは変色していて、何年も使われていないとひと目でわかった。割れた洗濯バサミはロープに留められていたのが、風雨にさらされ壊れたのだろう。

「死体はどこにあったんだ?」

俺はカメラをあちこちに向けながら訊ねた。

「わからない」

ミヤビは首をふった。ノートに屋上の見取り図を描いている。屋上は扉のある側が広い台形で、西半分を給水タンクとその土台が占めていた。床にしきつめた樹脂はところどころがはげていて、そこに水たまりができ、苔こけが生えている場所もあった。

給水タンクの土台はコンクリート製で、そこに固定された鉄柱にタンクが載っている。土台を回りこむと、フェンスとのあいだに一メートルほどの空間があった。

「この辺かな。人が屋上にきても、すぐは見えない場所だし、風とかも少しは防げそうじゃないか」

俺はいった。当然といえば当然だが、ここで人が暮らしていたと思えるようなものは何も無い。吸いガラひとつ落ちてはいない。

「そうね。タンクの下なら雨露もしのげるものね。このあたり、たくさん撮って」

ミヤビの言葉に従い、俺はそのあたりの写真を多めに撮った。しゃがんで、フェンスごしの景色も撮る。手前にあるアパートの屋根の先に星条旗がひるがえっていた。「スターズ・アンド・ストライプス」を見おろす位置なのだ。ここで死んだとすれば、最期に見たのは星条旗だったかもしれない。

ミヤビのバッグの中で携帯が音をたてた。

「はい、穴川です」

とりだし耳にあてたミヤビはいった。

「あ、はい！ できました。今、屋上にいます。すごい景色ですね。え？ いえ、友だちと二人できています。はい、はい……」

ローズビルのオーナーがまたかけてきたようだ。まるで俺たちが屋上に上がるのを待っていたかのようなタイミングだ。

俺は立ち上がった。カメラをかまえる。ズームアップすると、「スターズ・アンド・ストライプス」の建物が見えた。窓にブラインドがおりている。そのブラインドが揺れ、俺ははっとした。一瞬だが、こちらに黒い筒のようなものが向けられているのを見た気がしたのだ。

が、目をこらしても、もう何も見えない。

俺は足を開き、なるべくカメラがぶれないようにして「スターズ・アンド・ストライプス」の見える範囲の建物を観察した。が、もう何も見つからなかった。人影ひとつない。

カメラをおろし、ミヤビを見た。ミヤビは電話を終えていた。妙な顔で俺を見返した。

「どうした？」

「オーナーが、屋上からの眺めはどうだって。まるであたしらがいるのを、どこかから見たい」

「俺もそれは思った。すごいタイミングだなんて」

黒い筒のことはいわず、俺は頷いた。目の錯覚だったかもしれない。

「もしかすると、気付いているのかも」

ミヤビがいった。

「ここにいることを？」

俺が訊き返すとミヤビは首をふった。

「あたしらの本当の目的」

「え？」

俺はミヤビを見つめた。

「ここで死んだホームレスのことを調べているって」

「なぜそう思うんだ？」

俺が訊ねると、

「何となく、『屋上からの眺めはどうですか』って訊かれたけど、本当に知りたいのはそんなことじゃないんだろうっていわれているような気がした」

ミヤビは答えた。

「職業がライターだっていったからかな」

「でも四十年前の話だよ。今さら取材に誰かくるなんて思わないのじゃない？」

「確かに」

俺は頷いた。それに屋上にでたがった理由が四十年前の『事件』にあると気づいたら、ふつうは許可しない。

「次に電話がかかってきたら、直接訊いてみようかな」

ミヤビはつぶやいた。

「向こうの番号はわかっているんだろ」

俺がいうと、ミヤビは首をふった。

「それが非通知なんだ。二回とも、非通知でかかってきた」

「電話番号を知られたくないってことか」

「かもしれない」

俺たちは黙った。バタバタバタッと爆音が聞こえた。ヘリコプターが頭上を飛んでいる。「ス

ターズ・アンド・ストライプス」を飛びたち、どこかに向かうようだ。

ヘリの羽音が遠ざかると、下の通りを走る車の音やクラクションがやけに大きく響いてきた。

俺はブラインドの影に隠れた黒い筒のことをいおうかと迷い、やめた。カメラの画像をパソコンに落としたら確認できるかもしれない。

ミヤビに教えるのは、それからいい。今いえば、不安にさせるだけだ。

ミヤビが臆病おびょうでないことは知っている。

が、不確かな情報で動揺させる必要はない。

「他に撮っておくものあるか」

俺は訊ねた、ミヤビは無言であたりを見回し、首をふった。

「データは夜にでも、そっちにメールで送る」

「そうして」

俺たちは顔を見合わせた。

「何だか疲れちゃった。今日はこれで終わりにしようか」

ミヤビがいったので、俺は頷いた。

その晩家に帰った俺は、カメラのデータをパソコンに落とし、ローズビルの屋上から撮影した画像を拡大した。

「スターズ・アンド・ストライプス」を写した画像は、思ったより少なかった。全部で三枚しかない。そしてそのどれにも、黒い筒は写っていないかった。

やはり気のせいだったのか。

とりあえずその日撮った画像をすべてメールでミヤビのパソコンに送った。

すぐに返信がきた。明日、「蓮華堂」と連絡がついたらアポイントをとる。いつしよにきてほしい、とあり、了解と俺は返した。

翌朝十時に、ミヤビからメールが届いた。「蓮華堂」と連絡がつき、午後二時に赤坂八丁目のマンションを訪ねることになったが、その前に住人から話を聞きたいので、正午にローズビル集合でいいか、とある。

大丈夫だと返信し、俺はでかける仕度をした。

「送った写真どうだった？」

「ローズビルの前でミヤビと落ち合った俺は訊ねた。」

「ありがとう。よく撮れてた。撮れてたけど……」

ミヤビはいつて言葉を切った。

「ドラマを感じない、か」

「簡単にいえばそうかな。当然といえば当然なんだけど、画像には、なぜあそこで人が死んだのかを考えさせる要素が何も無い。六本木の、ごくふつうの風景って感じで」

それは俺も思った。何より、きのうの夕方、あの屋上で俺たち二人が感じた不気味さのようなものが、画像からは何も伝わってこない。

「俺の撮りかたが悪かったかな」

「撮りかたの問題じゃないよ。受け止める人間の気持の問題。それは暗いときとかに撮ればそういう雰囲気が出るかもしれないけど、演出でしかない。亡くなった人がなぜあそこを選んだのか、そういうものを感じるような何かは伝わってくるというのだけだ」

「もう一度屋上に上がって撮ってみるか」

あのあと、俺たちはバリケードを元通りに戻して帰った。いつでもバリケードを外したり戻したりできる。

「ううん。今日は他の部屋を当たろう」

ミヤビは首をふった。

401と402の住人に当たってみることにして、俺たちは階段を上った。